

マニラのスラム街をルポ



横浜市大探検部有志

横浜市大探検部の男子学生三人が、フィリピンの首都マニラにあるスラム街で生活、その体験ルポをまとめることになり、来月五日、現地に向けて出発する。経済大国・に酔いしれる日本から、生活環境が著わす、犯罪率も高い街での三週間。三人は「狭し、豊かさとは何かを考えてみたい」と、逆く胸躍る心をほせている。

『貧しさ豊かさを手取る』

リーダーは文理学部三年の六角 年の浅倉辰也君(左)。同行するのは商学部 三人が生活を体験するのは、ト三年の佐々木鉄朗君(右)、同二ノド地域とよばれるスラム。マニ

来月5日出発

3週間の異文化体験 バラック住まい 低い水道普及率 多い犯罪や暴動

▲マニラ行きの準備に忙しい大谷君(左端)、佐々木君(中央)、浅倉君(右端)＝横浜・金沢区の横浜市大探検部室で

ラ破の埋め平地などの、人口は約二十万人で、暴動や犯罪も多い。住居の生活について、大谷君は「バラック住まいが多く、風呂はた

は、シャワースタイルを売ったり、日雇い工事で生計を立てています。水道の普及率は二〇％に満たないので、川で洗たくしたり、用を足したりますますです」と予備知識を披露する。

三人の滞在期間は三週間。テント、ガスコンロ、薬、カメラ、記録メカなどを持ち込み、まずトノド地域のリーダーに会って、滞在許可を受けるといふ。その日に備え三人はいま、現地のタガログ語で「マガン・ダン・ウマガ(おはよう)」「マガン・ダン・ヘアボン(おやすみ)」「なんぞを猛特訓中だ。

佐々木君が「トノド地域で生活してルポにまとめるのは、日本人では初めてのことに思う。多少の危険は伴いますが、異文化に触れて、いろんな価値観を身につけたい」といふ。浅倉君も「アジアの諸民族を比較研究して、人間の貧しさ、豊かさを考えたい」。旅費は往復の飛行機代込みの十四万円。経費を切り詰め、現地の人も同じ生活水準にしようといふ。

